

愛は南から

町に暮らす

素敵な人たちを紹介します

全国学校図書館協議会長賞を受賞した

西口昌寿くんまさとし（緑小学校4年）



さかさまもいいなあ

さかさ町って何だろう。ぼくは、ふしぎに思いながら、この本を読んでいたよ。

この町は、何もかもがさかさまです。家もさかさま、車もさかさま。料理の出し方だって、さかさまで、デザートから出てくるのです。ふつう、デザートは最後に食べるのに、びっくりです。特にびっくりしたのは、この町では、子どもが働いて、大人が遊ぶことです。ふつう、大人が働いて、子どもが遊ぶのに。ぼくは、そんな変だな。何かおかしいと思いました。

でも、ぼくたちのくらしとこの町はさかさまで、変だなと思いつつながら読んでいたのに、読むうちになぜか、さかさもいいなあと思うようになりました。それは、病院でのことです。この町では病気の人がお金をはらうのではなく、健康な人がお金をはらうのです。ぼくは、なるほどと思いました。病気になる、なおるまで働けないのでお金が入りません。それに対

して、健康な人は、働けてお金も入ります。元気で健康な人がはらう。その方が、いい！いい考えだ！この町の学校では、「わすれよ科」という学習があります。ふつう、学校は覚えるところなのに、わすれよという教科があるなんて、学校じゃないじゃないか、やつぱり変。でも、その教科は、勉強を忘れるのではなくて、いやなことをわすれる教科でした。なるほど。いやな気持ちや、つづつともち続けるより、そんないやなことはわすれて、みんな楽しいことや、助け合うことを考えて生活した方が、ずっと幸せでいい！いい考えだ！

この町のアンストアは、お金がなくても買い物ができることにもびっくりです。バットを買うと、こつちがお金をはらうのではなく、お店の人が買った人にお金をはらうのです。心を込めて、精いっぱい作ったバットを買ってもらって、ありがたうというのです。

なんてすばらしい町なのだろう。ぼくは、この町が好きになりました。ぼくは、最初は、なんて変な

町なのだと思っていたけど、よく考えたら、この町の考え方がすごく理かいてきました。どんな町も、どんな人も、その町なり、その人なりのいいところがある。ぼくは、よく、「それはちがうことない。ふつうはこうやろ」と友達に言うけど、「ふつう」と考えていたことも、人によっては「ふつう」じゃない。一人一人に考え方があって、一人一人に、個性があります。その個性は、みんなちがっているけど、そのちがいを「ふつうじゃない」と決めつけてはだめなのではないかな。サッカーの上手な子、リコーダーのうまい子……。一人一人ちがう考え方や、できることがあって、それがいいのだな。そのちがいを、受け入れ合うってことが、大切なのだ。ぼくは、「ふつう」と自分のものさしで考えるのではなく、いろいろな方向から、時にはさかさからも考えてみようと思うようになりました。さかさまも、なかなかいいなあ。

全国学校図書館協議会などが主催する「第62回青少年読書感想文全国コンクール」で西口昌寿くん（緑小学校4年）の「さかさまもいいなあ」が全国学校図書館協議会長賞に輝きました。

何もかもさかさまな「さかさ町」。西口くんは読み進めるうちに自分が「ふつう」と考えていたことも、人によっては「ふつう」じゃないことに気づいたといえます。「一人一人ちがう考え方や、できることがあって、それがいい。そのちがいを、受け入れ合うってことが、大切」と記し「さかさまも、なかなかいいなあ」と締めくくりました。